日本語教育実践研究（１）
—「待遇コミュニケーション教育／学習」の実践—

蒲谷　宏

日本語教育実践研究（１）は、「待遇コミュニケーション教育／学習」について、実際の教育活動を通じて研究するためのクラスです。主に、中級後期から上級前期にかけての学習者が受講する口頭表現クラス（口頭表現６Ａクラス）を実習の場として、学習者の口頭表現における表現能力（コミュニケーション能力）を高めるために、どのような教育／学習をすればよいのかを実践的に考察していきます。それとともに、具体的な教材や教育／学習の方法論についても検討していくことになります。

０５年度秋学期の受講生は４名でした。今期は、「待遇コミュニケーション研究室」「文型・文法研究室」のメンバーの参加によって、担当教員、受講生相互に有益な交流の場になったと思います。今学期も引き続き、学習者の「待遇コミュニケーション」能力を高めるためにはどうすればよいのか、という話し合いを重ねつつ、実習クラスでの授業運営を進めました。

〈学習者が、ある「場面」において、「意図」を持って、コミュニケーションを行う能力を身につけ、高めていくためには、どのような授業を行えばよいのだろうか〉という課題の解決に向け、①学習者の問題点を修正する方法としての、〈練習—訂正—練習〉といったロールプレイの二段階法をどう実施するか、②学習者の〈「意識化」—「実践（練習）」—「定着」〉といった流れをどう作っていくか、③学習者自身が、〈「きもち（意図・様々な意識）」—「なかみ（表現内容）」—「かたち（表現形式）」〉をどのように一体化していけるのか、といったことを実践・考察のためのキーワード・枠組みとして、取り組んでいきました。

今期の特色は、実習生１名が１グループを担当することで、チームティーチングではなくなったことです。当然実習生の負担は大きくなりましたが、その分収穫も多かったのではないかと思います。今回は、グループロールプレイ、特にリレーロールプレイという方法に関して、実習生全員が取り組んだ成果をまとめ、掲載することになりました。こうしたロールプレイは、従来も試みられてきたことですが、改めてその問題点・課題が実践を通じて考察されています。「待遇コミュニケーション教育／学習」に関する課題について、自らの具体的な実践により解決策を考えていくという姿勢をもって、さらに考察を続け、検証していきたいと考えています。

（カバヤ　ヒロシ・日本語教育研究科教授）